



## 仕事のスタイル

12月10日、朝8時。

20人ほどの仕事人が集まった。

ジャケットに帽子、兼帯に地下足袋は、このまちで働く男たちのスタンダードスタイルといっている。各人の好みでジャケットの色使いが変わるくらいだ。彼らの今日のミッションは、直径15センチはある孟宗竹を竹やぶから切り出すこと。竹は、門松を作るために使われる。

竹林に入った男たち。ある者は、けたたましいチェーンソーの音を立て、またある者は鉋や鋸を振り、野太い獲物を仕留めにかかる。前日のうちにまっすぐな竹には目印をつけた。「曲がったようなヤツじゃ、いい門松にはならない」と仕事人の一人はいった。作るからには出来にこだわる。次第に先ほどまで暗かったやぶに、光が差し込んできた。

門松づくりは、容易ではない。

松、竹、梅。今ではなかなか手に入らず、揃えるのにひと苦労だ。竹だけはそこらじゅうで余っているが、やぶから持ち出すまでが大変な作業だ。仕事人たちは70代が中心。「そろそろ若い衆らに手渡さなきゃいかん」と口にする人もいる。しかし、作業する姿は現役そのもの。肩に重い竹を担いで歩く背中には、何ともいえない説得力がある。

## 品のある仕事

12月19日、この日も朝8時。

天竜区役所の玄関前で、門松を建てる作業が始まった。高さ2メートルを超える門松づくりは、毎年恒例のもの。これは全て仕事人たちの善意によるものだ。この日は、区役所のほかにも、小学校や中学校、警察署などの玄関が、仕事人の手によって、一足早く正月の装いに一変した。

作業は、実に手際が良い。そして、ここでも出来栄にこだわる。きちりとした仕事が彼らの信条だ。「今年は、センリョウが見事だな」と一人がいうと「こりゃあいい。あるのとないのじゃ全然違う」とみんなが口を揃える。わずかな差し色だが、その分量も品良く、何度か刺しては抜きと調整された。竹を縛った縁起物の海老結びが正面を向き、一對の門松が見事完成した。

「これで無事、正月が来るよ」とは、作業を終えて出たひとと言った。

仕事人たちは「阿多古川環境保全協議会」の面々。

誰かのために汗を流すことをいとわない、お手本のような人たち。

暮らしが見える。感じる体温。  
● ● ● ● ●  
Tenryu + Plus

曲がったような竹じゃ、  
話にならない。